

## 市町村と連携したウルシ活用による再造林推進の取組

青森県中南農林水産事務所 技師 坪 奈津美

### 1 はじめに

#### (1) テーマの趣旨・目的

青森県の南西部に位置する中南地域は、再造林率が県全体（28%）と比較し低い（11%、平成30年時点）という課題がありました。また、令和元年度から始まった森林経営管理制度により、森林所有者は市町村や林業経営体に森林経営の委託が可能になりましたが、担い手不足や財源の制約があります。そこで、制度を推進する一方、森林所有者自らが森林資源の造成を行うことが可能であれば、経営意欲及び再造林率の向上の一助になると考え、当地域が本県を代表する伝統工芸品「津軽塗」の主要産地で漆（樹脂）需要が有ること、ウルシ林施業の特徴（早い初期成長、短伐期、萌芽更新可能）、当地域の森林の所有形態（小規模所有者が大勢）に着目し、ウルシが森林所有者の新たな再造林の選択肢となるよう、市町村と連携してウルシ林資源の造成を推進することとし、関連する各技術の普及に平成30年度から取組みました。

#### (2) 現状

当地域は、津軽平野が広がり、県特産のりんごをはじめとした農業生産が盛んな地域です。

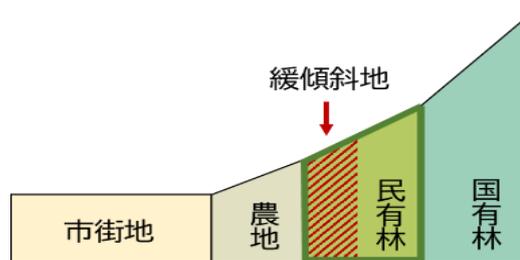
当地域の森林は、国有林面積が約7割を占め、民有林の中でも比較的農地に近い箇所は平坦な森林が広がっていますが、所有形態は小規模な面積の個人所有林が約64%と圧倒的に多いのが特徴です。

また、主伐期を迎え、皆伐面積が年々増加傾向ですが、再造林率（伐採面積に対する植栽面積の割合）は県内平均28%を大きく下回り11%となっていました（平成30年時点）。

伐採及び伐採後の造林の届出は9割以上が天然更新であり、その要因としては、森林所有者が木材価格の低迷等により皆伐後の再造林経費の負担を敬遠していることなどが挙げられます。

令和元年度に森林経営管理制度が始まりましたが、当地域では市町村・林業事業者ともに担い手や財源が不足しているため、すべての天然更新箇所を市町村や林業事業者自らが管理することは難しいのが現状です。

このため、森林所有者自らが意欲的に作業や管理することが可能な森林資源を造成していくことが、市町村の負担軽減、再造林率の向上の一助になると考えました。



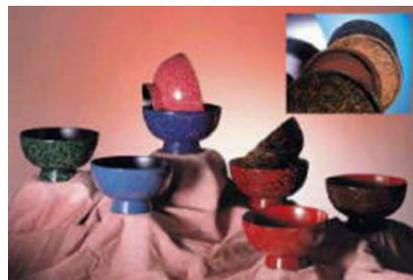
当地域の傾斜イメージ

(3) ウルシ林造成に着目した取組の方向性

①新たな漆（樹脂）の需要とウルシ資源の現状

そこで着目したのが、特用林産物であるウルシ（植物）の活用です。当地域は本県を代表する伝統工芸品「津軽塗」の主要産地ですが、それらの原料となる漆（樹脂）は外国産が殆どで、近年、津軽塗職人の団体から外国や他県産ではなく地元産の漆を使用したいという要望がありました。

当地域では江戸時代の津軽藩時代に漆の大量生産を目指し、ウルシの植栽が大規模に進められた歴史がありますが、現在も維持管理されているウルシ林は少なく、地域の漆資源の枯渇が懸念されていました。



当地域の伝統工芸品 津軽塗

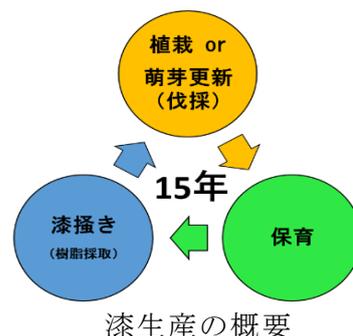
また、当地域ではウルシ苗木の生産者がおらず、ウルシ林の適切な管理方法、成林後の漆の採取方法を熟知した事業者がいないため、生産体制が整備されていない状況でした。

②ウルシ林施業の特徴

ウルシは落葉広葉樹で、樹脂は漆器生産や文化財建築物の修復などに使用される塗料に利用されています。

生物学的な特徴としては、陽樹で水はけの良い土壌を好むことなどが挙げられ、適地に植栽すると初期成長が早く、下刈などの保育作業の省力化が期待できます。

順調に成長した場合、15年程度で樹脂である漆が採取でき、林業的には短伐期施業といえ、漆を採取した晩秋に伐採することで萌芽更新が図られ、循環的な森林資源の利用が可能となることから、再生林コストの低減が期待できます。



漆生産の概要

一方、当地域においては、りんご園では、軽トラが走行可能な路網が整備され、隣接した林地へのアクセスが容易であることが特徴として挙げられ、ウルシ林を施業するにあたり、農業を営む森林所有者であれば、下刈にも利用できる刈払機などを所有しているため、管理技術が普及しやすく、新たな設備投資が不要です。

これらの特徴から、小面積の個人所有林であっても、ウルシの植栽により、所有者自ら作業可能な森林資源造成ができると考えました。

2 取組

ウルシ林施業の特徴と当地域の森林・森林所有者に係る現状から、以下の3つの取組を市町村と連携して行うこととし、ウルシ林を所有し、当地域で最も民有林面積が多い弘前市を中心に平成30年度から取組を開始しました。

(1) 苗木生産技術の普及

当地域におけるウルシ苗木の生産体制を整備するため、市町村、林業用苗木生産者、森林組合を含む林業事業者、津軽塗関係者等を対象に、地方独立行政法人青森県産業技術センター林業研究所職員を講師に、研修会を開催しました。研修会では、ウ

ウルシ種子の採取及び保管の仕方、種子の発芽促進処理技術、実生苗及び分根苗の生産技術について、研究成果や実技もあわせて説明しました。

あわせて、実際にウルシ苗木生産を希望する事業者に対しては、林業研究所と連携して現地指導や調査を行い、得苗数等のデータ収集や生育状況の確認・助言を行いました。



ウルシの幼苗

### (2) ウルシ林資源の造成

当地域の自然条件に合ったウルシ林造成の知見を収集するとともに、津軽塗職人が成林後に使用できるウルシ林を造成するため、ウルシ林経営に関心のある土地所有者の協力を得て苗木を無償配布し、モデル林の造成を行いました。モデル林は、津軽塗職人の団体からの要望を踏まえ、最低限の漆需要を満たすことができるウルシ 5,000本の植栽を目標にしました。

モデル林造成に当たっては、土地所有者に対し、ウルシ林の生育状況調査や施業技術の実証試験に協力し、植栽・保育を自力で行えることを条件としたほか、取組当初はウルシの植栽に適した土壌条件の民有林皆伐跡地が少なく、また市町村の農業関連部署から、りんご園等の耕作放棄地対策としてもウルシ植栽の実証を行いたいという要望が出されたことを踏まえ、民有林に加え、民有林に近い農地での造成も可としました。

協力者を募るため、ウルシ植栽に関するチラシを作成し、市町村の農林部局の窓口でこれらのチラシを掲示・配布するとともに、市町村広報等により募集を行いました。また、森林所有者から相談があった場合は市町村と情報共有して対応しました。



### (3) 漆生産関連技術の普及

モデル林協力者津軽塗関係者等へ技術を普及するため、漆産業の先進地である岩手県二戸市から外部講師を招き、ウルシ林の造成から漆生産までに必要な一連の技術を習得するための研修会を毎年開催しました。



研修会の実技指導の様子

研修会は、植栽地の選定方法や植栽・保育・萌芽更新の技術、樹脂の収穫段階である漆掻きについて、座学や実技を通して、研修会参加者に普及し、ウルシ林の造成から樹脂である漆の収穫までの一連の作業を実施できる担い手の育成を行いました。

ウルシ林の成林までには15年程度の期間を要することから、モデル林所有者や新規の植栽希望者等が行政の支援が無くても適切にウルシ林を造成できるよう、モデル林での生育調査や実証結果を整理するとともに、各研修会で普及した知



作成したマニュアル

## 様式2

識・技術、活用可能な補助制度についてまとめてマニュアルとして整理し、県のHPに公開したほか、冊子として関係者に配布しました。

### 3 結果

3つの取組により、以下のとおりウルシ林を育て、収穫し、また育てる体制を整備することができ、新たな担い手の参入などによる波及効果がありました。

#### (1) 苗木生産体制の整備

取組開始前は、当地域ではウルシ苗木の生産者がいませんでしたが、研修及び現地指導により林業用苗木生産者1者がウルシ苗木生産技術を習得したことで、継続的に苗木生産を行えるようになったほか、福祉団体がウルシに関心を持ち、新たに苗木の生産に取り組み始めたことから、ウルシ林の造成に関心のある森林所有者等へウルシ苗木を安定的に供給できる体制が整備されました。

#### (2) ウルシ林資源の造成

令和2年度から令和6年度の5年間で、約4,000本の苗木を配布するとともに、ウルシ植栽に関する広報を見て取組に関心を持った森林所有者が、自主的に皆伐跡地にウルシ植栽を行ったことで、目標としていた約5,000本(9.38ha)のウルシ林資源が造成されました。

また、当初は弘前市を中心にモデル林の造成を行ってきましたが、当地域の他市町村においてもウルシ林造成に対する関心が高まり、最終的には地域森林計画対象森林を有する3市1町1村全てに新たなウルシ林が造成されました。

#### (3) 漆生産関連技術の普及

取組前は、当地域でウルシ林の管理方法を熟知している事業者が限られていましたが、取組後は、研修会で普及した内容をもとにモデル林協力者らがウルシ林を適切に管理しているほか、津軽塗職人ら研修参加者へ漆掻きの技術を普及できました。

#### (4) 新たな担い手の参入

市町村の地道なPR活動や地元の伝統産業である「津軽塗」に貢献できるということもあり、当地域の福祉団体や建設業者等の新たな担い手がウルシ林造成の取組に参加したことから、これらの取組が端緒となって、林業以外の分野の方々に森林・林業へ関心を持ってもらう機会の創出に繋がりました。

また、県で開催した研修会をきっかけにウルシ林の造成に取組む関係者のコミュニティが新たに形成され、積極的な情報交換や協同でのウルシ植栽が自発的に実施されるようになったことから、今後は地域主体の取組に移行していくことが期待できます。

### 4 今後の課題・対応

当地域の天然更新箇所を少しでも減らすため、農地の近くのウルシ林植栽に適した森林をデータベース化して市町村へ提供することを検討しています。該当する森林の伐採届が提出された際には、市町村・林業事業体と連携して、再造林の必要性をPRするとともに、造林樹種の選択枝の1つとしてウルシを提案していきたいです。

また、研修会等でウルシ林に関連する技術を普及したモデル林の協力者や津軽塗職人関係者等に対しては、継続して下刈等の管理を行っているため、マニュアル等を活用

## 様式2

しながら、モデル林の成長に合わせた適切な施業を引き続き指導していきます。



造成されたウルシ林（左：令和2年度 右：令和6年度）